

抑うつ者に対する言外の意味を持つ性格特性語による拒絶 抑うつ相互作用モデルの修正の試み

著者	佐藤 宏平
雑誌名	東北教育心理学研究
巻	10
ページ	1-11
発行年	2006-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00121894

抑うつ者に対する言外の意味を持つ性格特性語による拒絶

— 抑うつ者の相互作用モデルの修正の試み —

佐藤 宏 平

(山形大学教職研究総合センター)

問題と目的

「現代は抑うつ時代だ」との言葉に代表されるように、抑うつは広く一般的な現象として認識されるようになっていく。実際、欧米における抑うつ者の疫学研究によれば、生涯有病率は10%～25%(Weissmann & Klerman, 1978)、時点有病率は8%～18%(Weissmann & Klerman, 1977)といわれ、また本邦においても、有病率は15%(藤原, 1995)や23.5%(友田・岩田, 1996)との指摘があり、こうした疫学調査からも裏付けられるように、抑うつ者の発症メカニズムを同定し抑うつを改善することは喫緊の課題となっている。

こうした抑うつ等の心理的問題に対して、短期・家族療法のMRI (Mental Research Institute) アプローチ (Fisch & Schlanger, 1999)では、問題を個人内の属性に還元するのではなく、IP (Identified Patient: 問題と見なされている患者) と家族や友人などの重要な他者との間の悪循環システムにより問題が維持され、こうした悪循環システムへ介入することで問題解決が成し遂げられると考えられている。

しかし、抑うつを維持させる悪循環システムが、抑うつ者と重要な他者との間のどのような相互作用によって成立しているのかという問題は、抑うつに対する短期・家族療法の実践において極めて重要な点であるにもかかわらず未だ明らかになっていないと言え難い。

こうした問題に示唆を与えうるモデルに、Coyne (1976b) による「抑うつ者の相互作用モデル (Interactive Model of Depression)」がある。このモデルは、抑うつ者に対する対人コミュニケーションから捉える生態学的モデルであり、以下のようなメカニズムが想定されている。

「抑うつ症状によって伝達されるメッセージは抑うつ者の他者に対する安らぎ (reassurance) や援助 (support) の要求であるが、重要な他者は初めこそ安らぎや援助を与えるものの、抑うつ者の抑うつ的な症状の持続は他者に拒絶などのネガティブな行動や認知、また敵意などの感情を引き出してしまふ。他者は、overt levelにおけるメッセー

ジとしては安らぎや援助を与え続けるのであるが、一方 covert levelにおけるメッセージとしては、抑うつ者に否定的な感情を持ち、抑うつ者を拒絶するような行動をとるというような欺き (deception) を始めるようになる。抑うつ者はこの他者からの間接的な拒絶 (つまりバーバルと内容の異なる拒絶) にうまく対処するスキルを持ち合わせていないために、抑うつを悪化させるという形でこれに反応し、さらなる拒絶と抑うつを招いてゆくという対人関係における悪循環によるらせん状進行過程をとる。」

(Coyne, 1976a)

従来の抑うつ者のモデルには、抑うつスキーマモデル (Beck et al., 1979) やイラショナルビリーフモデル (Ellis, 1962) のように、個人内の認知の歪みに着目する認知モデルがある。こうした認知モデルは、認知行動療法の基礎研究として数多くの検討が行われてきた。一方、抑うつ者の相互作用モデルは、抑うつ者の重要な他者による covert level と overt level で矛盾した曖昧なダブルバインド的なメッセージが抑うつを維持悪化させると想定する対人関係モデルである。抑うつを維持する対人コミュニケーションパターン (悪循環) が、重要な他者のどのようなコミュニケーションにより形成されているのかといった点に焦点を当てる抑うつ者の相互作用モデルの検討は、抑うつに対する短期・家族療法における介入対象を明確化する点で、短期・家族療法の実践に有用な知見をもたらすものであると考えられる。また、抑うつ者の相互作用モデルは、上述した認知モデルに比べ、特に本邦においては検討が少なく、そうした点でも抑うつ者の相互作用モデルを検討することは意義があると考えられる。

これまで、抑うつ者の相互作用モデルに関する実証的検討として、抑うつ者に対する重要な他者による拒絶が検討されてきたが^{*1}(例えば、Strack & Coyne, 1983; Gotlib & Robinson, 1982; Borden & Baum, 1987)、これらの研究においては、抑うつ者に対して拒絶が行われるとされる covert level として認知、非言語、感情が、一方拒絶が行われないとされる overt level として言語が仮定され、

^{*1}: これら実証研究の流れについては佐藤(2004)に詳しい。

検討がなされてきた。しかしながら、こうした従来の研究でみられる covert = 認知・非言語・感情、overt = 言語といった仮定に対して、佐藤(2001)は、これらの分類がやや単純に考えられてきたことを指摘し、言語にも多重な構造があり、言語においても covert level として拒絶を伝達する機能を果たすものがあるのではないかと述べている。

例えば、Osgood, Suci & Tannebaum(1957)が、SD (Semantic Differential) 法によって、概念の意味は「評価性 (Evaluation)」、「力量性 (Potency)」、「活動性 (Activity)」の3次元に位置づけられると指摘しているように、言葉は、「文字通りの意味 (literal meaning)」に加え、語が持つニュアンスといった「言外の意味 (conversational implicature)*2」を有している。

言語の文字通りの意味と、それ以外の言外の意味を分けて捉えた際に、こうした明示性を欠く曖昧な言外の意味は、明示性の欠如という点では認知、非言語、感情と同様に covert な性質を有しており、抑うつ者に対する拒絶のチャンネルとして用いられる可能性は十分に考えられるのではないだろうか。

こうした言外に意味を有すると思われる言葉に、桑原(1986)や坂本(1994)で使用されている性格特性語リストがある。坂本(1994)が、「物事を堪え忍びなかなかあきらめない」という性格特性は、肯定的に表現すれば“粘り強い”ということになり、否定的に表現すれば“しつこい”ということになろう」と述べているように、性格特性語には、肯定的な言外の意味を有する語と否定的な言外の意味を有する語が存在している。そして、これらの性格特性語リストに取り上げられている性格特性語対は、例えば、“話好きな” - “おしゃべりな”、“物静かな” - “暗い”といった文字通りの意味としては極めて類似した意味を示しながら、肯定もしくは否定のニュアンスを言外に有する性格特性語の対となるよう構成されている。

これまで、抑うつ者の相互作用モデルの検討においては、言語においては拒絶がなされないと想定されてきたが、上述のように言語においても言外の意味を有する言葉においては、抑うつ者に対する重要な他者による拒絶が行われるのではないかと予測されることから、本研究では、言外の意味を有する言葉として性格特性語を取り上げ、この性格特性語による拒絶について検討する。抑うつ者は、非抑うつ者に比べ、重要な他者からより否定的なニュアンスを言外に有する性格特性語で表現されやすいことが予想される。尚、検討にあたり、実際の相互作用場面の録画データを用

いることが望ましいとは思われるが、時間的に限られた録画データにおいて、抑うつ者が性格特性語リストに取り上げられた性格特性語によって表現されるような場面が再現されることは考えにくい。そこで検討にあたっては、架空の相互作用場面を用いる。具体的には、抑うつ者（もしくは非抑うつ者）を記述した架空の人物刺激文を呈示し、それらの人物刺激文に記述された人物を友人と仮定した相互作用場面を対象者にイメージさせ、イメージされた相互作用場面においてその人物を表現する語として、リストに挙げられたそれぞれの性格特性語がどれくらいの頻度で用いられるかを質問紙によって検討する。また Rosenblatt & Greenberg(1988)は、抑うつ者に対して、その重要な他者が抑うつ的な場合には拒絶が生じ難い傾向がみられることを指摘している（類似性仮説）。すなわち、対象者が抑うつ的な場合には、架空の人物刺激文に対する拒絶が生じないことが予想される。そこで、対象者自身の抑うつ要因も同時に検討する。さらに、抑うつ要因に加えて、コミュニケーションの際に、人間関係を維持するために婉曲的な表現を行う傾向（婉曲表現傾向）も抑うつ者に対する拒絶の媒介要因として作用することが考えられる。すなわち対象者が婉曲表現傾向を有する場合には、言外の意味を持つ性格特性語による拒絶が生じないことが予測され、この点に関しても併せて検討する（研究1）。

研究1

1. 目的

研究1では、抑うつ者の相互作用モデルの検討の一部として、架空の相互作用場面を用いて、抑うつ者への言外の意味を有する性格特性語がどのような頻度で使用されるかを検討するにあたり、以下の仮説を検証することを目的とする。

- 仮説1 抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者のそれに比して高いであろう。
- 仮説2 対象者の抑うつ傾向が低い場合には、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者のそれに比して高いが、対象者の抑うつ傾向が高い場合には、両者に差は見られないであろう。
- 仮説3 対象者の婉曲表現傾向が低い場合には、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者のそれに比して高いが、対象者の抑うつ傾向が高い場合には、両者に差は見られないであろう。

*2: “言外の意味”は、“文字通りの意味”が意味論の領域とされるのに対して、一般的には語用論の守備範囲とされており、日常の様々な文脈における言葉の実践的な機能を表す言葉として用いられる傾向がある。しかし、本研究においては、“言外の意味”を“語が持つニュアンス”の意味で用いることとする。

2. 方法

(1) 対象者

対象者は、A市の専門学校生64名(男子24名・女子40名)で、平均年齢は19.92歳であった。

(2) 質問紙及び刺激材料

①抑うつ尺度

抑うつ指標として、ツァン自己記入式抑うつ尺度(Zung Self-Reported Depression Scale: 以下SDS; Zung, 1965)の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。SDSは抑うつ傾向のスクリーニングテストとして一般的な尺度であり、「気が沈んで憂鬱だ」、「たやすく決断できる(逆転項目)」などの20項目に対して、項目の状態が最近1週間の自分の状態においてどれくらいの頻度でみられるかを「ない、たまに」～「ほとんどいつも」までの4件法で回答する尺度である。尚、実施にあたって、風邪等の身体的不調がSDS得点へ影響する可能性を排除するために、体調も併せてチェックされた。

②性格特性語の使用頻度

人格の二面性の測定を目的として桑原(1986)により作成された性格特性語(60対、120項目)をもとに、坂本(1994)が抑うつ病前性格に関連のない特性語を省き作成した特性語リスト(Appendix, 1)を使用した。このリストは、性格特性を表す形容詞から構成されるものであるが、ある特性に対して肯定的なニュアンスを持つ形容詞と、それらと類似の意味を持つが否定的なニュアンスをもつ形容詞(e.g. 社交的-八方美人、物静か-陰気な、大胆-向こう見ずな)46対92項目からなるものである。相互作用場面において、抑うつ刺激文もしくは非抑うつ刺激文で記述される人物に対する表現として、これらの性格特性語を使用する頻度を「絶対に使用しない」～「必ず使用する」までの5件法にて回答を求めた。

③婉曲表現傾向尺度

対人関係を維持するために、相互作用場面において婉曲的な表現を使用する傾向を測定する6項目からなる尺度である(Appendix, 2)。4件法で回答を求めた。

④抑うつ刺激文及び非抑うつ刺激文

Hammen & Peters(1977)で使用された抑うつ的な学生と非抑うつ的な学生の日常生活を記述した刺激文を参考に、新たに作成したものを使用した(Appendix, 3)。

(3) 手続き

講義内において集合調査形式にて実施した。まず対象者は、フェイスシートに性別と年齢を記入し、次に抑うつ刺激文(もしくは非抑うつ刺激文)を読むように求められた。尚、この刺激文の呈示に際して、記述されている人物を、対象者自身の親密な同性の友人と想定し、さらにその刺激文に記

述された人物と相互作用をする場面をイメージするように教示され、その人物と相互作用する場面において、その人物を表現する言葉として性格特性語をどれくらいの頻度で使用するかについて回答を求められた。最後に、対象者らは、SDS、婉曲表現傾向尺度、及びアンケートへ回答した。

3. 結果

(1) 性格特性語得点から拒絶表現得点への換算方法

はじめに、本研究の従属変数となる拒絶表現得点の算出方法について述べる。

まず性格特性語リストにおいて、否定的な意味をもつ性格特性語の得点から、その特性語と対をなす肯定的な意味を持つ性格特性語の減じた数値を算出した。次に、坂本(1992)における因子分析において、因子としてまとまらなかった9項目対(18特性語)は算出の対象から外し、37項目対の差の合計を算出し、これを拒絶表現得点とした。そのため、この拒絶表現得点は、点数が高いほど拒絶が高いことを表す。

(2) 刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)が

拒絶表現の採用に及ぼす影響の分析

刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)の拒絶表現得点の平均値をFig. 1に示した。t検定を行ったところ、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点に比べて有意に高かった($t(62)=2.19, p<.05$)。

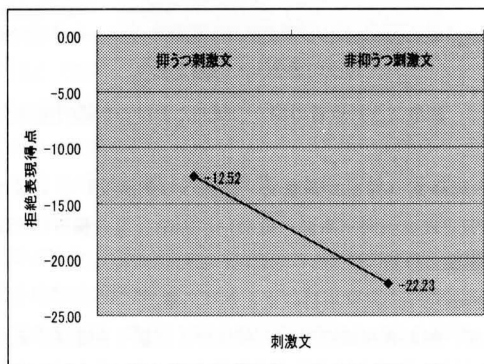


Fig. 1 刺激文の内容における拒絶表現得点

(3) 刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)と対象者の抑うつ傾向(高群・低群)が拒絶表現の採用に及ぼす影響の分析

① 対象者の抑うつ傾向(高群・低群)の群分けと各群の対象者数

対象者のSDS得点の平均は、43.98(SD=7.67)であった。性別によるSDS得点に差は見られなかったため、男女のカットオフポイントに差はもうけず、平均値を基準に

44点以上を抑うつ傾向高群、43点以下を抑うつ傾向低群とした。各群のSDS得点の平均値及び標準偏差は、抑うつ傾向高群が50.25 (SD = 4.48)、抑うつ傾向低群が37.72 (SD = 4.30)であった。

上述の抑うつ傾向の群分けによる各群の人数は、抑うつ刺激文・抑うつ傾向高群が15名(男子5名・女子10名)、抑うつ刺激文・抑うつ傾向低群が14名(男子5名・女子9名)、非抑うつ刺激文・抑うつ傾向高群が17名(男子10名・女子7名)、非抑うつ刺激文・抑うつ傾向低群が18名(男子4名・女子14名)であった。

②刺激文の文章表現の違いと対象者の抑うつ傾向が拒絶表現の採用に及ぼす影響の分析

刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)×抑うつ傾向(高群・低群)の拒絶表現得点の平均値をFig. 2に示した。二要因分散分析を行ったところ、刺激文要因の主効果のみ有意であり、($F(1, 60)=5.80, p<.05$)、対象者の抑うつ傾向の高低にかかわらず、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は高かった。

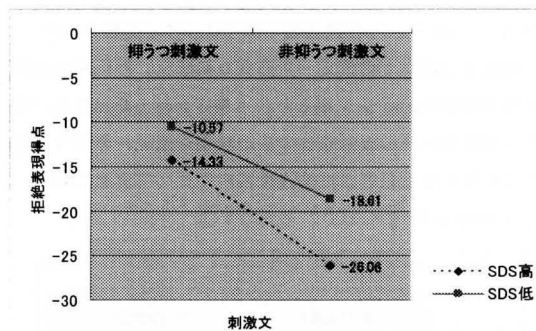


Fig. 2 刺激文と対象者の抑うつ傾向における拒絶表現得点

(4) 刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)と対象者の婉曲表現傾向(高群・低群)が拒絶表現の採用に及ぼす影響の分析

①婉曲表現傾向尺度項目のまとまりの確認

まず、婉曲表現傾向尺度の項目のまとまりを確認するために、婉曲表現傾向尺度の全6項目についてクロンバックの α 信頼係数を算出した。その結果、全6項目の α 係数は.75であり、分析に耐えうるまとまりであると判断し、分析を進めた。

②対象者の婉曲表現傾向傾向(高群・低群)の群分けと各群の対象者数

対象者の婉曲表現傾向尺度の平均得点は17.03 (SD = 4.27)であった。平均値を基準にして婉曲表現傾向高群と婉曲表現傾向低群に分けた。分析対象者は、抑うつ刺激文・婉曲表現傾向高群が16名(男子6名・女子10名)、抑うつ刺

激文・婉曲表現傾向低群が13名(男子4名・女子9名)、非抑うつ刺激文・婉曲表現傾向高群が18名(男子7名・女子11名)、非抑うつ刺激文・婉曲表現傾向低群が17名(男子7名・女子10名)であった。

③刺激文の文章表現の違いと対象者の婉曲表現傾向が拒絶表現得点に及ぼす影響の分析

次に拒絶表現得点に関して、刺激文(抑うつ刺激文・非抑うつ刺激文)×婉曲表現傾向(高群・低群)の平均値をFig. 3に示した。二要因分散分析を行ったところ、交互作用のみ有意であり($F(1, 60)=4.96, p<.05$)、対象者の婉曲表現傾向が高い場合には刺激文の効果は見られないが、婉曲表現傾向が低い場合には刺激文の効果が見られ、抑うつ刺激文を読んだ対象者は非抑うつ刺激文を読んだ対象者に比べ拒絶表現得点が高かった。

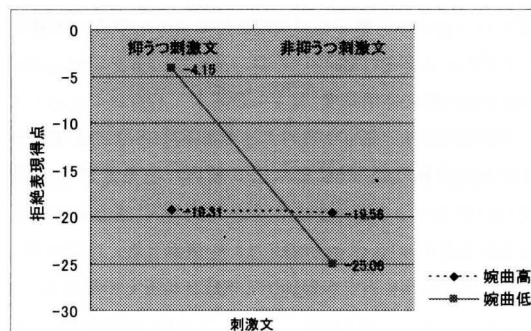


Fig. 3 刺激文と婉曲表現傾向における拒絶表現得点

4. 考察

(1) 研究1の結果について

本研究では、抑うつの相互作用モデルの検討を進めるにあたり、架空の相互作用場面を用いて、言外の意味を持つ性格特性語による拒絶の検討を行った。刺激文要因に加えて、対象者の抑うつ傾向、婉曲表現傾向の要因も併せて検討した。

①拒絶表現得点における刺激文の影響について

拒絶表現得点について、刺激文の影響を検討した結果、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点に比べ高く、仮説1は支持された。しかしながら、本結果は、相対的には抑うつ刺激文に対する拒絶表現得点が、非抑うつ刺激文に対する拒絶表現得点に比べて低いという結果であったものの、否定語得点-肯定語得点によって算出された受容拒絶得点の値がマイナスとなっており、拒絶が高いというよりは、受容が低いと解釈すべき結果であった。

②拒絶表現得点における刺激文と対象者の抑うつ傾向の影響について

拒絶表現得点について、刺激文と対象者の抑うつ傾向の

影響を検討した結果、対象者の抑うつ傾向にかかわらず、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は、非抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点に比べ高かった。すなわち、拒絶表現得点における刺激文の影響は見られたが、対象者の抑うつ傾向の影響は見られず、仮説2は支持されなかった。重要な他者を想定した対象者の抑うつ傾向の影響が見られなかった本研究の結果は、重要な他者が抑うつ者の場合には抑うつ者は拒絶されないとする Rosenblatt & Greenberg(1988)の結果と一致するものではない。今後、この原因が今回用いた架空相互作用状況によるものなのか、非言語行動と言外の意味という取り上げた指標の違いを反映したものなのか、さらなる検討が望まれる。また仮説1の結果同様、拒絶表現得点の値が、マイナスとなっており、拒絶が高いというよりは受容されない、もしくは肯定されないといった解釈の方が妥当と思われる。

③拒絶表現得点における刺激文と対象者の婉曲表現傾向の影響について

拒絶表現得点について、刺激文と対象者の婉曲表現傾向の影響を分散分析で検討した結果、交互作用が見られ、Fig. 3に示されたように、対象者の婉曲表現傾向が低い場合に、抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点は非抑うつ刺激文を読んだ対象者の拒絶表現得点に比べ高かったが、対象者の婉曲表現傾向が高い場合には差が見られず、仮説3を支持する結果となった。しかし、やはり仮説1及び仮説2の検討同様、拒絶表現得点はマイナスとなっており、受容されないと解釈すべき結果であった。研究1で得られた拒絶表現得点の値がマイナスとなった結果の要因としては、架空の相互作用場面を用いたことが考えられ、今後実際の相互作用場面における検討が望まれる。

(2) 研究1の結果からの抑うつ相互作用モデルに対する示唆について

研究1の結果より、抑うつ相互作用モデルに関する示唆について述べる。

本研究は、刺激文でイメージされる人物との架空の相互作用場面を用いた検討であり、実際の相互作用場面ではないために、本研究の結果を実際の相互作用場面に適用して考えることには慎重である必要がある。しかしながら、本研究の結果より、実際の場面に外挿して考えると、抑うつ者に対して、言語レベルにおいても、性格特性語といった言外の意味を有する言語レベルにおいて拒絶が見られることの可能性が示唆された。また、重要な他者の抑うつ傾向が高い場合には、抑うつ者に対する拒絶が生じないとする類似性仮説は支持されなかったが、重要な他者の婉曲表現志向の要因が拒絶に影響を与えることが示唆された。今後実際の相互作用場面における検討や、性格特性語以外の言

外の意味を有する言語を用いた拒絶の検討が望まれるとともに、重要な他者の属性に注目した検討がなされる必要がある。

研究2

1. 目的

研究1より、抑うつ者に対する性格特性語における拒絶がみられる可能性が示唆される結果が得られたが、研究2では実際にメッセージの受け手にネガティブに認知されるかどうかを、研究1同様、架空の相互作用場面を用いて検討する。検討にあたり、抑うつ者は、ネガティブに歪んだ認知(ネガティブ・バイアス)をすることが知られており(Beck, et al. 1979)、こうしたメッセージ認知に関しても、非抑うつ者に比べネガティブに捉える傾向が高いことが考えられる。そこで、メッセージ認知においても受け手の抑うつ要因を併せて検討する。

研究2では、以下の仮説の検討を目的とする。

仮説1 否定的な言外の意味を有する性格特性語で自らが表現された場合には、肯定的な言外の意味を有する性格特性語で自らが表現された場合に比べて、ネガティブに認知する。

仮説2 抑うつ傾向が高い場合に、低い場合に比べて、特に否定的な言外の意味を有する性格特性語で自らが表現された場合に、よりネガティブに認知する。

2. 方法

(1) 対象者

対象者は、A市の専門学校2年生65名(男子27名・女子38名)であり、平均年齢は20.02歳であった。

(2) 質問紙

①抑うつ尺度

抑うつ尺度に関して、研究1と同様に、福田・小林(1973)によるツァン自己記入式抑うつ尺度日本語版(SDS)を使用した。

②性格特性語認知

研究1同様、坂本(1994)の性格特性語リストを使用した。研究の目的上、友人との相互作用場面において、友人からこれらの性格特性語で自分が表現される発言を受けた際に、どのようにそのメッセージを受け取るかを“非常にネガティブ(1)”～“非常にポジティブ(6)”までの6件法で回答させた。

(3) 手続き

心理学関連の講義内において集合調査形式にて実施された。対象者はまずフェイスシートに回答し、その後、性格特性語認知、SDS、アンケートの順で回答した。

3. 結果

(1) 性格特性語（肯定語・否定語）に対する受け手の認知について

性格特性語認知項目の内容別（肯定語・否定語）の合計得点を Fig. 4 に示す。尚、この得点は、点数が低いほどネガティブな認知を行っていることを示している。t 検定を行ったところ、否定語の合計得点は肯定語の合計得点に比べて有意に低く、否定語は肯定語に比べてネガティブに認知されていた ($t(64)=13.92, p<.01$)。

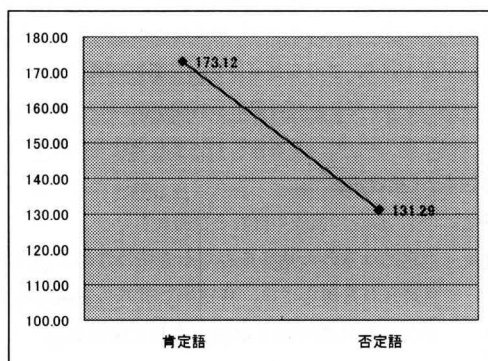


Fig. 4 性格特性語内容（肯定・否定）の各項目合計得点

(2) 性格特性語（肯定語・否定語）の認知と受け手の抑うつ傾向（高群・低群）の関係

①受け手の抑うつ傾向（高群・低群）の群分けと各群の人数
まず、対象者全員の SDS 得点の平均得点を算出したところ、平均得点は 44.5 (SD = 6.61) であった。SDS 得点に関して性差は見られなかったため、カットオフポイントに差はもうけず、平均得点を基準に 44 点以下を低抑うつ群、45 点以上を高抑うつ群とした。その結果、最終的な分析の対象者は、抑うつ傾向高群 31 名（男子 11 名・女子 20 名）、抑うつ傾向低群 34 名（男子 16 名・女子 18 名）であった。

②性格特性語（肯定語・否定語）の認知と受け手の抑うつ傾向（高群・低群）の関係

性格特性語項目の合計得点に対して、受け手の抑うつ傾向（高群・低群）×特性語項目の内容（肯定語・否定語）の各水準の値を Fig. 5 に示す。二元配置分散分析を行ったところ、内容（肯定語・否定語）のみに主効果が見られ ($F(1, 63)=192.04, p<.01$)、受け手の抑うつ傾向にかかわらず、否定語は肯定語に比べてネガティブに認知されていた。

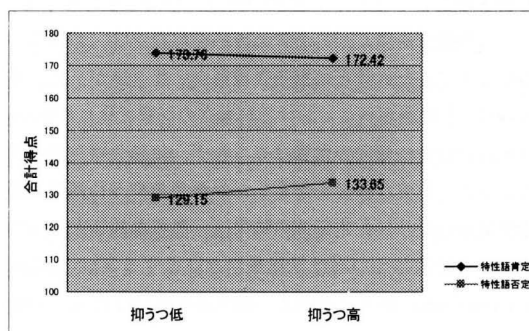


Fig. 5 受け手の抑うつ傾向（高・低）と性格特性語内容（肯定・否定）における各項目合計得点

4. 考察

研究 2 では、架空の友人との相互作用場面を用いて、性格特性語による拒絶に対する受け手の認知を検討した。また、受け手の抑うつ要因も併せて検討した。

その結果、否定的な意味を言外に含む性格特性語は、肯定的な意味を言外に含む性格特性語に比べてよりネガティブに受け取られており、仮説 1 は支持された。また抑うつ要因もあわせた検討では、否定的な意味を含む性格特性語は、肯定的な意味を含む性格特性語に比べてネガティブに受け取られていたが、メッセージ認知における抑うつ傾向によるバイアスは見られないという結果が得られ、仮説 2 は支持されなかった。

この結果は、重要な他者からの言外の意味を有する性格特性語による拒絶は、受け手の抑うつ傾向の高低にかかわらず、ネガティブに認知されることが示唆された結果といえる。

総合考察

本研究の研究 1 においては、友人間の架空の相互作用場面を設定して、言外の意味を持つと思われる性格特性語を用い、抑うつ者に対する重要な他者の拒絶の検討を行った。その結果、抑うつ者に対しては、非抑うつ者に比べて肯定的な性格特性語よりも否定的な性格特性語で表現されやすい可能性があることが示唆された。特に重要な他者が婉曲的な表現を用いる傾向が強い場合には、こうした傾向は見られないが、婉曲的な表現を用いる傾向が弱い場合には、この傾向が顕著であることが示された。

研究 2 においては、言外の意味をもつ性格特性語による拒絶が、実際に拒絶として認知されるのかどうかについて受け手の抑うつ傾向も併せて検討された。その結果、性格特性語における拒絶は、受け手の抑うつ傾向にかかわらず

ネガティブに認知されることが示された。

本研究の結果より、抑うつ相互作用モデルで従来仮定されてきた、言語レベルにおいては支持、非言語レベルにおいては拒絶といった単純な構造にはなっておらず、抑うつ相互作用モデルを一部修正することを示唆する結果が得られた。そしてその言語レベルにおける拒絶は、言外の意味を持つとされる性格特性語といった、明示的ではない曖昧で潜在的なレベルで行われており、また、こうしたレベルにおける拒絶は、受け手にとってはネガティブに認知され、さらなる抑うつの悪化につながる可能性が示唆された。

こうした、言語レベルにおいても、比較的covertな側面である言外の意味を持つ言語において拒絶が伝達される理由としては、佐藤(2001)が指摘するように、これらの言語が意識的なコントロールが効き難い隠蔽困難なチャネルであることと、仮に抑うつ者によって関係を脅かしたい意図が言及されにくく、仮に言及された場合においても、その意図を否定し、言い逃れする事も可能なチャネルであることが考えられる。

また一方で、こうした曖昧な言語は、抑うつ者に対する拒絶や攻撃性をストレートな表現ではなく曖昧な形で伝達することによって、対人関係を維持する機能を果たしていると思われる。こうした点では、対人関係の維持と葛藤において笑顔が見られるといった対人システムの自己制御性に関する一連の研究(例えば、生田・若島・長谷川, 1999; 生田, 2000)や、葛藤的な話題においては、相互作用レベルが低下するとするディスクオリフィケーションや問題-相互作用モデル(Problem-Interaction Model:PIM)に関する研究(例えば、若島, 2000; 若島, 2002)といった、対人システムを守るために行われる様々なコミュニケーション上のストラテジーを指摘する研究において言及されている現象とも関連しており、今後さらなる展開が望まれよう。また、本研究の結果は、あくまで刺激文と架空の相互作用場面で得られた結果であり、今後、臨床レベルの抑うつ者をを用いた検討や実際の相互作用場面における検討が望まれる。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、ご指導をいただきました東北大学大学院教授長谷川啓三先生、菊池武剋先生、本郷一夫先生、宇野忍先生、また調査にご協力いただいた調査対象者の方々に心より感謝いたします。

引用文献

- Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F. & Emery, G. 1979
Cognitive therapy of depression. New York: Guilford.
(坂野雄二監訳 1992 うつ病の認知療法. 岩崎学術出版社.)
- Borden, J. W. & Baum, C. G. 1987 Investigation of a
social-interactive model of depression with mildly
depressed male and female. *Sex Roles*, 17, 449-465.
- Coyne, J. C. 1976a Depression and the response of
others. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 186-193.
- Coyne, J. C. 1976b Toward interpersonal description of
depression. *Psychiatry*, 39, 2, 8-40.
- Ellis, A. 1962 Reason and emotion in psychotherapy.
New York: Lyle Stuart. (国分康孝・伊藤順康訳 1981
論理療法-自己説得のサイコセラピー. 川島書店.)
- Fisch, R. & Schlanger, K. 1999 Brief therapy with
intimidating cases. Jossey-Bass Inc., Pub. (長谷川
啓三監訳 2001 難治例のブリーフセラピー-MRIミニ
マルシンキング. 金子書房.)
- 藤原茂樹 1998 一般人口におけるうつ病の頻度および発
症要因に関する疫学的研究. *慶応医学*, 72, 511-528.
- Gotlib, I. H. & Robinson, L. A. 1982 Responses to
depressed individuals: discrepancies between self-
report and observer-rated behavior. *Journal of
Abnormal Psychology*, 91, 4, 231-240.
- Hammen, C. L. & Peters, S. D. 1977 Differential
response to male and female depressive relations.
Journal of Consulting and Clinical Psychology, 45,
994-1001.
- 生田倫子・若島孔文・長谷川啓三 1999 笑顔表情の自己
制御的機能について-表情と葛藤方略との関係性-. *家
族心理学研究*, 13, 115-122.
- 生田倫子 2000 対人システムにおける自己制御的機能に
関する研究. *家族心理学研究*, 14, 1, 29-40.
- 桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み-
NEGATIVE語を加えて-. *教育心理学研究*, 34, 31-38.
- 森知子 1982 質問紙法による人格の二面性測定の試み.
心理学研究, 54, 182-188.
- Osgood, C. E., Suci, G. J. & Tannebaum, P. H. 1957
The Measurement of meaning. University of Illinois
Press.
- Rosenblatt, A. & Greenberg, J. 1991 Examining the
world of the depressed: depressed people prefer
others who are depressed? *Journal of Personality
and Social Psychology*, 60, 620-629.

- 坂本真士 1994 抑うつ者の性格特性の自己評価におけるネガティビティ・バイアス. 心理学研究, 65, 156-161.
- 佐藤宏平 2000 拒絶要因としてのSDS得点及び性差—同性の友人による相談場面における抑うつの相互作用モデルの検討—. 日本家族心理学会第17回大会発表抄録集, p. 51.
- 佐藤宏平 2001 軽症抑うつ大学生に対する言語における拒絶—トピック及びマネージメント言語に着目して—. 日本家族心理学会第18回大会発表抄録集, p. 24.
- 佐藤宏平・若島孔文・久保順也 2002 抑うつ的な女子学生に対する短期家族療法的アプローチ—戦略的な面接日程と重要な他者、そしてクライエントのコンテキストの重要性—. 臨床心理学, 2, 771-783.
- 佐藤宏平 2004 抑うつの相互作用モデルに関する研究の動向. 山形大学心理教育相談室紀要, 273-82.
- Strack, S. & Coyne, J. C. 1983 Social confirmation of dysphoria: Shared and private reaction to depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 798-806.
- 友田貴子・岩田昇・北村俊則 1996 精神的健康に及ぼすスポーツの活動の効果. 体力研究, 91, 133-141.
- 若島孔文 2000 脱文脈コミュニケーションの生起を予測する問題—相互作用モデルの確証—MRIコミュニケーション理論の視点から—. 学校カウンセリング研究, 3, 9-18.
- 若島孔文 2002 ディスクオリフィケーションを予測する「問題—相互作用モデル」の提案—夫婦の葛藤的会話の分析から—. 聖路加看護大学紀要, 29, 22-31.
- Watzlawick, P. & Coyne, J. C. 1980 Depression following stroke: Brief, problem—focused family treatment. *Family Process*, 19, 13-18.
- Weissmann, M. M. & Klerman, G. 1977 Sex differences and the epidemiology of depression. *Archives of General Psychiatry*, 34, 98-111.
- Weissmann, M. M. & Klerman, G. 1978 Epidemiology of mental disorders. *Archives of General Psychiatry*, 35, 705-712.
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

Rejection through trait adjectives with positive and negative connotation to depressed people: An attempt at revision of interactive model of depression.

Kohei SATO
Yamagata University, Teacher Training Center

Coyne(1976b) proposed the interactive model of depression that depressed people elicited social rejection from significant others, and depression was aggravated by vice circle that depressed symptoms increase in the value of significant other's rejection to the depressed people, and rejection to them also increases in the depressed symptoms. Moreover, according to this model, rejection was communicated at nonverbal level such as nodding, not at verbal level, because verbal was overt and nonverbal was covert. However, a few empirical studies pointed that rejection is conducted in verbal level.

In Study1, it was examined, under the imaginary interaction setting and paper-pencil measures, the rejection to the depression people at the verbal level, particularly focusing on the trait adjectives with positive and negative connotation, including factors of sender's depression level and tendency of euphemism.

As a result, depressed target were described of trait adjectives with more negative connotation and less positive connotation than non-depressed target. In addition, subjects who tend to communicate less euphemistic used more negative connotation and less positive connotation as description of depressed target than more euphemistic subjects.

Study 2 investigated that receiver's cognition to the rejection at connotation, including receiver's degree of depression. Results indicated that negative connotation was estimated more negative than positive connotation. but there was no difference between high depressive receiver and low depressive receiver. The considerations of these results and interactive model of depression were discussed.

Appendix1 性格特性語リスト

-
1. 相手の考えていることに気を使う
 2. 互いに傷つけないように気を使う
 3. 自分を犠牲にしても相手につくす
 4. 言いたいことを我慢する方である
 5. 友達関係を壊すようなことは口にしない
 6. 思ったことは正直に口に出す方だ (逆転項目)
-

α 係数=.75

Appendix2 婉曲表現傾向尺度項目

- | | | |
|--------------|---------------|---------------|
| (1) 口数少ない | (32) 理屈っぽい | (63) あっさりした |
| (2) 怠惰な | (33) 指導的 | (64) 気の弱い |
| (3) のんきな | (34) 聞いてばかりの | (65) ロマンティックな |
| (4) こだわる | (35) 慎重な | (66) 執念深い |
| (5) 淡々とした | (36) 荒々しい | (67) 太っ腹な |
| (6) 激しやすい | (37) 社交的 | (68) 軽率な |
| (7) 気が強い | (38) 思い切りの悪い | (69) 現実的な |
| (8) のぼせやすい | (39) クールな | (70) 野蛮な |
| (9) 直感的 | (40) がむしやんな | (71) 熱中する |
| (10) 我が強い | (41) 粘り強い | (72) おせっかい |
| (11) 女性的 | (42) ずぶとい | (73) 人情に厚い |
| (12) しつこい | (43) もの静か | (74) 温室育ちの |
| (13) 勇猛な | (44) ぐずぐずした | (75) のんびりした |
| (14) むっつりした | (45) あきらめのよい | (76) 支配的 |
| (15) 用心深い | (46) 口上手な | (77) 大胆 |
| (16) おしゃべり | (47) 話好きな | (78) 現実離れした |
| (17) 人に干渉しない | (48) 人づきあいの悪い | (79) おっとりした |
| (18) 追従的 | (49) 男性的 | (80) なよなよした |
| (19) 冷静な | (50) めけた | (81) 分析的 |
| (20) むこうみずな | (51) デリケートな | (82) そっけない |
| (21) おっとりした | (52) 粘りのない | (83) 従順 |
| (22) 情に流される | (53) 気軽な | (84) さわがしい |
| (23) 孤独を好む | (54) 場当たりの | (85) エネルギッシュな |
| (24) 情けが薄い | (55) 話しじょうずな | (86) 実利的 |
| (25) しぶとい | (56) なげやりな | (87) てきぱきした |
| (26) せかせかした | (57) 臨機応変の | (88) 冷めた |
| (27) 世話好きの | (58) 無感動な | (89) おとなしい |
| (28) 疑い深い | (59) 陽気な | (90) 小心 |
| (29) 細心 | (60) 非論理的 | (91) 執着する |
| (30) 線の細い | (61) 聞きじょうずな | (92) 八方美人 |
| (31) 情熱的 | (62) 陰気な | |

(1) 抑うつ刺激文

「〇〇は18歳の専門学校の新入生である。〇〇は高校の成績も優秀で学校にもなじみ、同級生とも上手くやっていた。しかし専門学校生活が始まると2、3の困難な問題が生じてきた。専門学校で課せられる課題が、自分が考えていたものよりも難しく、また高校時代からつきあっていた異性の自分に対する関心が最近薄れ始めてきていると感じ始めていたのだった。

ここ数週間というもの、〇〇はかなり落ち込んでいた。〇〇は、現在〇〇に起こっている出来事について本当に惨めであると感じていたし、この先これらの問題が解決されると思えなかった。同性や異性の友人と一緒に外出しても、憂鬱な気分を解消できるとも、楽しい気分になれるとも思われなかった。〇〇は専門学校から課せられる課題に精一杯ついてゆこうとしたが、ますます遅れていった。なぜなら〇〇は多くの時間を失望的で悲観的な考えに支配されていたからである。先日〇〇の友人の一人が、昼食と一緒に食べようと誘ったのだが、〇〇は断った。というのは、〇〇は最近食事をとりたいたいと思わなくなっていたし、全く食欲がないと感じていたからである。しばしば〇〇は朝起きるのが困難になり、実際、自分の家で一人で過ごす時間がどんどん長くなっていった。〇〇には何かをするためのエネルギーが全く残っていなかったのである。」

(2) 非抑うつ刺激文

「〇〇は18歳の専門学校の新入生である。〇〇は高校の成績も優秀で学校にもなじみ、同級生とも上手くやっていた。専門学校生活が始まり環境も随分変わったし、専門学校から出される課題も思った以上に難しいものではあったが何とかこなしていた。また高校時代からつきあっていた異性とも順調にやっていたのであった。

ここ数週間は、〇〇は友人関係においても、高校時代からの友達に加えて、専門学校で出来た友達ともにつき合いが始まり、週に何度かはそれらの友達と飲みに行ったり、買い物に行ったりするのだった。〇〇は飲み会や買い物に行くことを非常に楽しいものであると感じており、また学生時代の友人を大切にしようと考えていた。学業の方では専門学校から課せられる数多くの課題も充実感を持って取り組めるようになっていた。〇〇は家にいることはほとんどなく、専門学校のインターネットルームで就職の情報を集めたり、メールのやりとりをしたりして過ごし、その後友人と遊んだり、バイトに出かけたりするのであった。〇〇は充実感とエネルギーにあふれた生活を送っていたのである。」
